

# 遠隔協調学習における学びの創成

## — 授業の「転機」をめぐる通時的・共時的視点 —

山田 剛史

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

### ■ 問題意識

#### 1. 多様化する現代大学教育における「学び」再考

昨今の大学改革におけるカリキュラム編成等の自由化や学力低下に対する導入教育・補習教育の展開など、大学における「知」の在り方が多様化している。そこで、知識獲得や研究を射程に入れた専門教育を進めることの重要性はもちろんであるが、より広範な視点から「学び」について考える必要があるのではないかと、これが1点目の問題意識である。

#### 2. 学びを捉える「研究者」と「学生」の視点の差異

学びはどこで起こっているのか。現場(授業)か学生の中か。現象レベルでは前者であろうが、学生自身が「その場」で学びとして自覚しているのだろうか。学生は、経験を物語化することで事後解的に学びとして了解しているのではないかと、多くの研究では、調査(記述)か面接(口頭)かという違いはあるが、学生の自己報告に委ねている。が、より包括的に「学び」を捉えるためには、両者の視点をブレンドしていくことが必要ではないかと、これが2点目の問題意識である。

#### 3. 授業を捉える「転機」という視点

通常、授業は問題なく進行するよう教員が統制する。が、特に学生構成型授業・協調学習などの場合、偶発性の高い出来事が生じやすい。それが、時に授業の進行を妨げたりあるいは発展の契機となったりする。記憶や発達の見地から、転機のもたらす影響は大きい。そこで、「授業の転機」といった視点から授業を捉えることを第3の問題意識とする。

### ■ 研究目的

授業の「転機」をめぐる“通時的(外在的)視点”と“共時的(内在的)視点”を付き合わせ、その異同に着目し、ボトムアップ的に重要なファクターを抽出する。その上で、大学教育における「学び」の在り方について考究することを目的とする。

### ■ 実践概要

**実践対象**は、2003年度から3年間実施された「京都大学・鳴門教育大学バーチャル・ユニバーシティ(KNV 実践)」で、**実践形態**は、両大学をインターネット回線で接続し、ビデオチャットを利用した遠隔協調授業。本報告の対象となる2005年度の**担当スタッフ**は、京大側5名、鳴教大側5名で、**対象学生**は、京大12名(教育学部在籍の2・3回生)、鳴教大7名(現職教員2名を含む大学院生)であった。**授業形態**は、学生を3つのグループに振り分け、「教育に関すること」というゆるやかなテーマ設定の下、学生主導型(教員は非指示的)で進行する。**補助ツール**として、授業時の①ビデオチャットの他に、②電子掲示板、③チャット、④テレビ会議システムを利用し、授業の最後には⑤全体の振り返りを行った。

### ■ 方 法

**分析対象**は、①ビデオチャットの様子を撮影したビデオデータと②授業後に実施したインタビューデータ(1名平均1時

間)で、「転機」として語られた場面を対象とする。質問内容は「第1回目の顔合わせから、最終の合同発表に至る一連のプロセスを物語として捉えたときに、あなたにとって転機あるいは転換点となった回・出来事・発言はどのようなものでしたか」であった。

**対象事例**は、京大側の班員全て(3名)が同じ回の同じ出来事を転機として捉えていた「教師(鳴教大)対生徒(京大)の継続的対立構造の解体」とし、分析・検討を行う。

### ■ 結果と考察

#### 1. インタビューから抽出されたこと

- 硬直状態(上下関係)の解体
- 共変関係(変化の双方向性)が見られたこと  
(鳴教側)「講釈(防衛)」→「提案」  
(京大側)「反発(防衛)」→「自発的な質問」
- 体験談という素材の効果(「平等性」の確保)

#### 2. ビデオチャットから抽出されたこと

- 画面上への in / out (cf. パーソナルスペース)
- 言語的・非言語的コミュニケーション (cf. うなずき)
- 話し方・声の質の変化 (cf. 同調的会話、笑顔)
- 会話のスムーズな流れ (cf. 質疑応答、会話遮断×)

#### 3. 両方法の摺り合わせ

前者は内容が整然としていて(静的、肯定的方向へと主観的体制化(物語化)がなされているが、後者は語りでは表現し得ない変化を捉える重要な指標が埋め込まれている。通常、メディアを介した研究では、ログや質問紙、インタビューなど記述化されたデータが用いられるが、両方法から得られるデータは本来相補完的なものであり、彼らが語る(記述する)もととなっている授業(経験)を付き合わせていくことで、より包括的な授業研究が可能となる。

#### 4. 「学び」再考

第1に、授業におけるメディアの使用(遠隔教育)は対面教育と対比的・批判的・閉鎖的に論じられることが多いが、メディアは「ツール(道具としてのメディア)」ではなく、身体の一部として構成される「環境メディア (cf. 美濃, 2004)」として考え、両教育方法の利点を活かした「学びのデザイン」を考えていく必要があろう (cf. 渡部, 2005)。

第2に、偶発性・自由度の高い授業の中で、学生の変化を「知識獲得」といった狭義の学びに限定されることなく、「知識構成 (cf. 鈴木他, 2002)」ひいては「自己形成 (cf. 溝上, 2002)」や「相互形成 (cf. 田中, 2002)」といった広義の視点から捉え直していく (cf. 山田・溝上, 2004)、また、そうした教育を可能とする「授業デザイン」を考えていく必要があろう。

(Tsuayoshi Yamada)

**【付記】**本授業実践は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「大学授業実践の質的研究にもとづく電子メディア化とFDネットワークの構築(代表者:田中毎実,平成15-17年度)」の助成を受けている。また、共同で授業に当たったスタッフと参加学生に感謝申し上げる。